

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制（農業使用基準等）等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第2号 畑作物

発行日 平成25年 4月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ（電話 0197-68-4436）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 小麦 ほ場の排水口や明きよの点検補修を行いましょ。減数分裂期以降の追肥は、品種、地力を考慮し、生育量に応じて行いましょ。赤かび病の防除は、開花始期～盛期に必ず行いましょ。
- ◆ 大豆 圃場の選定を吟味しましょ。

小麦

1 生育状況

根雪期間がやや長かったものの、越冬後の好天により起生期は平年並みで、湿害の発生も少なく越冬後の生育も概ね順調に進みました。4月中旬から下旬にかけて一時気温の低い日が続きましたが、概ね平年並みの生育となっています。

2 病害の発生状況

雪腐病は、一部の地域で多発生となっているほ場が見られるものの、全県では平年並の発生となっています。コムギ縮萎病・ムギ類縮萎病については、平年並の発生は場率となっており、例年発生の見られる地域では株全体が黄化し、茎立ちが遅れているほ場も見られます。

3 今後の管理

(1) 排水対策

ほ場の排水口や明きよの点検補修を行い、スムーズに排水できるようにしましょ。排水口や明きよが埋まっていないか、ごみが詰まっていないか確認し、確実に排水できるようにしましょ。

(2) 後期追肥の実施

減数分裂期以降の窒素追肥で、子実の充実とタンパク質含量の向上を図りましょ。ただし、生育量や品種によって追肥の有無、時期、量が異なります。

追肥の対応は、減数分裂期に生育栄養診断を行い、その結果に基づいて追肥量を判断しますが（表1）、地力を考慮し、ほ場にあわせた判断が必要となります。無理に追肥を行って、倒伏や、生育にバラツキが出ないようにしましょ。また、地域によってタンパク質含量に差がみられますので、過去の実績を参考に追肥量を調節してください。

表1 減数分裂期における生育目標値（上限値）と追肥対応

診断項目・指標	品種	ナンブコムギ (目標値)	ゆきちから (上限値)
	草丈(cm)		55～65
減数分裂期	有効茎数(本/m ²)	450～550*	500*
	葉色(n-1葉のSPAD値)	36～44*	47
追肥対応	目標値（上限値）を超えるとき	追肥しない	穂揃期に窒素成分で2kg/10a
	目標値（上限値）の範囲内のとき	減数分裂期に窒素成分で2kg/10a	穂揃期に窒素成分で4kg/10a

注）*印は、追肥対応のための主要な診断項目。減数分裂期は、約半分の有効茎の止葉の葉耳が出た時期を目安とする。この時期は出穂期の概ね10日前となる。

(3) 赤かび病の防除

開花始期～盛期に必ず薬剤防除を行います。2回目の防除は1回目の防除から7～10日後に行い

ます。曇雨天が続く場合には、さらに追加防除が必要となります。

小麦の開花は出穂してから1週間程度後となりますが、年によっては低温により出穂・開花が遅れたり、不斉一となることが予想されますので、ほ場の観察をこまめに行い、適期に薬剤防除を行いましょう。また、罹病穂の抜き取りは穂が緑色のうちに行いましょう。

表2 赤かび抵抗性に応じた小麦奨励品種別の防除適期

品種名	赤かび抵抗性	防除適期		
		開花期 (1回目散布)	1回目散布の 7～10日後	2回目散布の 7～10日後
ナンブコムギ	中	必須	曇雨天が続く場合 追加散布	—
ゆきちから ネバリゴシ	中	必須	必須	曇雨天が続く場合追加散布

大豆

1 ほ場の選定

ブロックローテーションの場合は、大豆作に不向きなほ場は計画から除外するなど、ほ場の選定から吟味しまししょう。

2 連作防止

連作による病害虫の蔓延、地力の低下、雑草の多発などが問題となっています。長期的な展望を持って、計画的な土地利用、作付けをすすめてまししょう。

マメシンクイガは、大豆の連作で密度が高まり、水田に戻すことで被害を回避できることが知られています。昨年被害が目立ったほ場は、大豆の作付けを見送るなどの対策が有効です。

3 排水対策

大豆は初期の湿害が収穫時にまで影響する作物です。ほ場周囲の排水溝やほ場内の明渠、補助暗きよ等の対策を講じ、良好な初期生育を促しまししょう。

4 播種適期

播種期は、早限を出芽時に晩霜の心配のない頃、晩限を霜による強制登熟で未熟粒が多発する心配のない頃に設定します。概ね、県北部では5月中下旬、県中部では5月中旬から6月上旬、県南部では6月上中旬が播種適期となります。

5 適正な栽植密度の確保

畦間は70cm程度を標準とし、中耕培土等の中間管理や収穫に用いる機械の幅に応じて作業が効率的に行えるように設定します。品種ごとに好適な栽植密度とするためには、株間の調整が必要です。

表3 普通大豆の品種別栽植密度と播種量

項目	ユキホマレ	ナンブシロメ	リュウホウ	青丸くん
栽植密度(本/10a)	2万～3万	1万～1万2千	7千～1万5千	1万～1万2千
畦間×株間(cm)*	70×14～9 30×30～22	70×30～24	70×40～20	70×30～24
播種量(kg/10a)	6～9	2.5～3	2.5～5	2.5～3

注) *は、畦間を70cm、1株2本立てとした場合を示した。

「ユキホマレ」の麦後栽培では畦間30cm前後の狭畦密植とする。

「リュウホウ」は、播種期により栽植密度を調整する(晩播ほど密植とする)。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]
[~6月15日]
慣れと油断が事故のもと いつもの作業もまず確認！

次号は5月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。